

Title	日本語研究のながれ
Author(s)	徳川, 宗賢
Citation	阪大日本語研究. 1989, 1, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5231
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

日本語研究のながれ

Trends in Studies of Japanese

徳川宗賢

キーワード：日本語研究史 国語学史 日本語教育

1. ここでは、日本人による日本語研究のながれ、その千年の歴史を、ごく巨視的に展望する。最初に結論めいたことをのべるなら、日本人による日本語研究は、かならずなにか切実な現実的課題に直面して、それに対処することを契機としてスタートした。そして研究がひとたび軌道にのると、当然学問の自律作用がはたらいて、研究の深化がすすむことになる。そして一定の安定期をむかえることになるのであるが、かならずつぎのあたらしい刺激がくわわってきて、それに関する対処を契機として、日本語の研究はふたたびあたらしい局面をむかえることになる、と略述することができよう。

なお、日本人以外の外国人による日本語研究については、別途かんがえることにしたい。近年をのぞいてそれはほとんどが独立しておこなわれ、日本人による日本語研究と交差することが、まったくといっていいほどなかったからである。

2. さて、日本人による日本語研究、ないしは研究らしきものは、千年のむかし、まず異言語との接触、対照のなかで、その萌芽をはぐくんだと、いいいい。現在うかがいしることのできる当時の状況は、中国語に関するものがほとんどであるが、当然中国語以外の外国語との接触もあったかと思われる。しかし、ここでは資料的制約から、中国語との接触、対照を中心にかんがえることにする。

日本人は、漢字や漢文に接して、はじめは非常に困惑したものと想像される。それをいかに解説するかが、まず問題となる。しかしとぎがたつにつれて、工夫をかさね、次第に漢字に訓をあたえ、漢文を訓読する技法をそだてていった。そのいとなみは、まことに現実的であったといわねばならない。そのとき、はなしことばとしての中国語との関係がどのようなものであったか、また、いわゆる渡来人のちからが当時どの程度作用していたかは、十分にあきらかでない。それはともかく、解説のほか、元来は中国語表記のために開発された漢字をつらねて、どのように日本語ないし日本に関する事実を表記表現するかが、問題となったことを忘れることができない。そこにはいろいろな障害があったかと想像されるが、まずかんがえるのは、人名地名などの固有名詞をどう表記するかであり、ついで特色ある日本の待遇法を、どのように表現するかが問題となったであろう。ともあれ漢文の訓読と漢字による日本語ないし日本に関する事実の表現は、かならずや雁行して発展していったものと思われる。

漢字、漢語、漢文と日本語との接触面で、いろいろな辞書が編集された。また、次第に、日本語表記のための独自の文字であるひらがなやかたかなが発生してくる。しかしそのあたりのことは、ここでは一切省略することとする。

3. ところで、漢文によってつたえられる内容には、当然仏教に関するものがふくまれていた。仏典研究はすでに中国大陸でもおこなわれており（異境でのことではあるが、ここにも異言語との接触の例がみられる）、その影響もあって、日本でもサンスクリット語（梵語）の研究がおこなわれるようになった。いわゆる悉曇学である。外国で発達した言語研究との接触も、千年来の日本人の日本語研究の発展に、各時代を通じて、おおきく寄与してきたが、この悉曇学とのめぐりあいは、その早期の一例となる。この悉曇学の影響もあって、日本語そのものの音韻や文法に対する観察が刺激されることになる。たとえば日本語音節の一覧表としての五十音図は、悉曇の字母表を基礎にしてできたといわれる。外国で発達した言語研究の

影響のひとつの具体例とすることができよう。

なお、漢文の訓読をめぐる、朝鮮半島における漢文訓読のことはみみにすることがあるが、ウイグルにおいても独自に漢文訓読の技法が模索されていたらしいという報告を最近きいた。はつみみであり、興味ぶかかったので、わきみちにそれるが付記しておく（神戸外大の庄垣内正弘氏による）。

4. 以上は外国語、あるいは外国の学問との接触を契機にして生じた日本語研究である。そのほか、日本人が日本語自体に接しているうちに発生した分野もあった。日本人の日本語への関心としては、まず、目前の日本語のバリエーション（変種）に対する関心をスタートにするものがある。当然、日常生活のなかからうまれてきたテーマということができる。たとえば語の新古の別や雅俗の別については、すでに8世紀初頭からその記述がめにつく（「古語拾遺」（806）、「常陸国風土記」（721）など）。方言についての注目が8世紀の中葉にはなひらいたことは、よく知られている（「万葉集防人歌」（755）など）。また、一種の職業語というべきいみことば（忌詞）については、9世紀初頭にその記述がみられる（「皇太神宮儀式帳」（804）など）。以上は、注意をむけているといった程度のもので、もちろん研究の域に達しているとはまだいえないが、多少研究的なものとしての語源説明のこころみは、日本語最古のまとまった文献としての「古事記」（712）のなかに、すでにその片鱗をあらわしている。

5. その後、日本の文化が歴史をかさねるにつれて、そこに記録されている古典語と日常語との差が、徐々に拡大していく。そのみぞをうめていくための日本語への反省が、次第に日本語研究の原動力となってくる。自分自身と古典語との距離をちぢめたいという欲求は、古今東西、ごく自然なものである。

「日本書記」完成（720）後、百年ももたないうちに、はやくもその講述がおこなわれたという（弘仁三年（812）以降）。また「万葉集」解読の

ための梨壺の五人のはなしもある（天曆五年（951））。

6. 日本語研究という面から、もうすこしくわしくみることにしよう。まずとりあげられるべきは、和歌、ややくだっては連歌をめぐってのテニヲハ研究である。これは古典理解のためのいとなみであるとともに、みずからの古典語による作歌のための方途であったことにも注意せねばならない。テニヲハへの注目は、おそらく最初は漢文訓読、漢字による日本語の表現のなかでうまれたのであろう。すでに「万葉集」のなかにその証拠をみいだすことができる（巻十九の三箇辞闕之の歌や六箇辞闕之の歌など）。そしてこの古典語のテニヲハ研究についての研究が、今日まで脈々として日本人の日本語研究のふといはしらとなっていることは、だれもがよく知っている。藤原前任の「新撰髓脳」（10世紀末ごろ）から藤原定家の作といわれる「手爾葉大概抄」（13世紀の末ごろか）、二条良基の「連理秘抄」（1349）、くだって富士谷成章の「あゆひ抄」（1778）、さらにそれ以降の研究へと各時代を通じて連綿として展開したその詳細については、いま省略することにする。

7. テニヲハ研究について、かなづかひの研究がある。音韻の歴史的変化にともなって音韻と表記にずれが生じ、表記法に動揺がおこって発生した話題である。それなら、どのように表記すべきなのか。なにが正統なものなのか、といったことが問題となる。いうまでもないが、これは実用問題、現実の問題である。藤原定家がはじめてこの問題を取りあげたとされる（12世紀末の「下官集」）。そしてこのかなづかひの研究は、はるかに時代のくだる五百年後、契沖の「和字正濫抄」（1693）によって、おおいに訂正され、深化をみることになる。

契沖は、古典文献の表記を客観的なちばから帰納することによって、いわゆる歴史的かなづかひの基礎を確立した。そしてこの研究の客観性科学性は、日本人の学問研究全体のなかでも特筆すべく、この書の出現をもって日本語研究史の古代と近代との分岐点に位置づけるひとも多い。なぜ

契沖がこのような科学的態度をとることができるようになったかについては、議論のおおいところである。本人の資質とともに、おそらく漢学におけるあたらしい傾向に対する当人の教養によるところがおおきかったのであろう。

8. 用言の活用体系の全体があきらかになるためには、テニヲハ研究やかなづかい研究と同様に、これまたながい時間の経過を要した。活用に対する関心は、最初は漢文訓読、漢字による日本語の表記に端を発し、すでにのべた悉曇学やかなづかいの研究に関連して、だんだんとふかめられたものとかんがえられる（14世紀の「八轉声抄」や15世紀の「仮名遣近道」など）。それがいわゆる国学時代をむかえて、かかりむすびの研究とからみあいながら、以下にのべる諸研究がおこなわれることとなる。すなわち賀茂真淵の「語意考」（1759初稿）、富士谷成章の「あゆひ抄」（1778）、本居宣長の「言語活用抄（御国詞活用抄）」（1782）、鈴木服の「活語断読譜」（1790ごろ）、本居春庭の「詞八衢」（1808）、東条義門の「活語指南」（1840）などである。次第に展開し、完成にむかっていった。

9. そもそも国学は、中国文化の光のかげにかくれて真髓がみうしなわれがちになっていた、本来の日本文化の解明を当面の目標としていた。ひとことでいえば、ナショナルイズムの文化運動とっていいであろう。あるいは日本的ルネッサンスであろうか。そしてその目標に立脚して、日本古来の純粋な文化を反映する「古事記」「万葉集」のこことばの研究が要請されたのであった。まさにフィロロジーの展開である。研究の深化につれて学問の自律作用がはたらき、鈴木服や本居春庭といった日本語研究の専門家ともいうべきひとびとが誕生したのも事実である。まさに空前のことであった。しかしそのスタートには、やはり具体的な問題を解明しなければならぬといった、現実的な意図のあったことは忘れることができない。研究の水準は結構高いものとなったが、最初は、言語の研究そのものは、いいすぎかもしれないが、それ自体は目的ではなく、方便にすぎなかった

のである。

10. 江戸時代の日本語研究については、あと三点ほどつけくわえておくことにしたい。まず、貝原益軒の「日本釈名」（1700）や新井白石の「東雅」（1717～）に代表される、単語の意味や語源に関する研究がある。これも結局は、古典との距離をちぢめようとするいとなみとして位置づけることができよう。そしてその延長として、谷川士清の「倭訓栞」（1777～）や、石川雅望の「雅言集覧」（1826～）に代表される辞書が編集されることになった。

つぎに、それまでになかった方言に対するあたらしい視点がくわわることに注目したい。もっともその内容は、ことばのみだれを指摘する安原貞室の「かたこと」（1650）をのぞいて、中央語と方言を対照する、いわば方言集がほとんどであった。ともあれ、江戸時代をむかえて発達したあたらしい社会体制に應ずるものということができる。現在のめからは純粋な学問研究の域に達しているとはいいがたいが、これらもやはり日常生活のなかから問題をくみあげて展開した分野と位置づけることができる。本草書のなかに記録されている各地の植物名の方言なども、もちろん実用に供せられるためのものであった。

さらに、鈴木胤の「言語四種論」（1824）に代表される品詞分類論がある。これは体と用とを区別する中国語学の影響のもとに次第に成熟していった分野ということが出来る。そして従来からおこなわれてきた伝統的なテニヲハ研究や活用研究の延長線上に位置づけることもできようが、作歌のための研究といった面はあったにしても、まずは、学問の自律作用によって開拓推進された分野とってよろしかろう。

11. 明治の開国をむかえて、日本は、あらたに西洋の国々と交際するようになった。それまでになかったあたらしい世界がひらけたことになる。オランダとの交流はもちろんそれ以前からあったが、西洋からのあたらしい実用的な刺激は、意外なことに、明治大正の時代をふりかえって、さか

んな日本語研究をうむにいたらなかったようにおもわれる。なにかとんでもない誤解をしているのかもしれないが、最初にのべたように、漢字や漢文との接触を通じては日本人の日本語に対する反省がうまれたのであったが、それと比較してそうおもうのである。たとえば英語文献の日本語訳、あるいは逆に日本語文献の英語訳を通じて、つまり対照言語学的な視点から、大々的に日本語の研究が発展をみせてもよさそうなのに、例外はあるにしても、どうもそうならないようにおもえるのである。なぜそうなのかはよくわからないが、まず、西洋の刺激が、急激しかも圧倒的だったことを考慮すべきなのかもしれない。いいかえれば、英語との接触も、現在まででわずか百数十年、まだ機が熟していないといえるのかもしれない。また、もしかすると、明治以降の学界の体制、ふみこんでいえば、たとえば言語学と国語学、国語国文学と英語英文学が、まったく別組織としてくみたてられてきたことなどが、なにか関係しているのではあるまいかと想像してみたが、どうであろうか。実はすぐれた研究が明治大正期にすでにたくさんあったのに、国語学＝日本語研究のなかにきちんと位置づけられていないのかもしれないともおもうのである。

12. 西洋の刺激の日本人の日本語研究への影響といえば、なにをおいても、西洋で発達した言語学の輸入に注目しなければならない。日本のあたらしい言語学の開祖は、いうまでもなく上田万年(1867～1937)である。おおまかにいえば、上田は、日本語の具体的研究を、弟子の橋本進吉(1882～1945)に託した(なお方言の研究は東条操(1884～1966)に、琉球方言の研究は伊波普猷(1876～1947)に託したと考えられる)。

橋本の研究は、大観すれば、その照準はふるい時代の日本語、しかもその音韻の研究にさだめられていた。上田の留学さきからもちかえった言語学が、当時のヨーロッパでさかんだった歴史言語学＝比較言語学だったことも、その一因であろう。また、日本人が日本語に接するとき、なにをおいてもまず問題意識としてとりあげられるのが、ふるい時代の日本語であったことであろう。小稿の4以下でのべた前代の日本人の関心に連続して

いるといってもいい。二十世紀最末期の現代の日本人による日本語研究＝国語学の主流についても、依然として過去の日本語の研究、いわゆる国語史とされるゆえんも、このへんにさぐることができるかと思われる。

なお、国語学の内部におけるいわゆる国語史研究においては、ときの経過につれて、そのあつかう資料の範囲が、古典から、漢文訓読資料である訓点資料、室町時代の講義ノートである抄物資料、16世紀末から17世紀初頭にかけてのポルトガルやスペインの宣教師たちがのこしたキリシタン資料へと拡大していった。分野も音韻や文法から、語彙や文章文体へと展開した。これらの拡大は、巨視的には、学問の自律的發展として位置づけることができよう。別のことばでいえば、学問の専門性の確立である。

13. 日本の大学における日本語研究が、ながいあいだ国文学研究の補助学科としての国語学として位置づけられてきたことも、明治以降の日本人による日本語研究の性格を考える際、わすれることのできない視点である。まず、国文学とか国語学という名称がおもしろい。国史学も同様であるが、そこにはナショナリズムへの傾斜が感じとられ、対照言語学的視点を拒絶する、孤高の姿勢をよみとることができる。また、普遍より特殊のこのまれるかおりもする。

ここで、余談になるが、中村通夫氏（1911～）が近代日本語を卒業論文のテーマにとりあげようとしたとき、指導教官が、そんな研究は国語学としてふさわしくないとさとしたという伝説を思い出した。戊辰戦争から現在までちょうど120年、その中間地点ごろの時代の国語学の専門性、雰囲気伝える、好逸話かと思われる。

14. 西洋の文法書を参考にしつつ日本語の文法を記述しようとするころみは、江戸時代の鶴峯戊申の「語学究理九品九格総括図式」（1830）と「語学新書」（1833）にはじまるといわれる。その伝統は、明治にはいつて大槻文彦の「広日本文典」（1897）、山田孝雄の「日本文法論」（1908）、さらに現代へと連続する。時枝誠記の「国語学原論」（1941）などはむし

ろ西洋の理論に対するアンチテーゼとしてあらわされたものであるが、いまこの辺にふかいる必要はないであろう。文法書をあらわそうとする意志は、教育上や言語政策遂行上の目的もあるかもしれないが、その中心は、これはもう学問の自律性にもとづくものであることはいうまでもない。

ここでは文典について瞥見した。明治以降の音韻研究、語彙・辞書研究などについては、いまずべて省略にしたがう。

15. はなしはあともどりするが、上田万年は、明治の日本語の問題として、まず第一は表記の問題（漢字制限、かなづかい、カナ、ローマ字）、つぎにあたらしい文体の問題（文語文から言文一致体の口語文へ）、そしてみつつめに標準語の問題（東西二方言の対立、標準はなしことばの確立）をとりあげた。以上三点は相互に関連していわゆる国語問題として総括されるが、上田はこれらに対処するために、文部省内に国語調査委員会（1902～1913）をもうけて解決につとめた（それにさきだって、上田は、1897年、東京帝国大学文科大学内に、国語研究室を開設した。文科系の研究室としてもっともふるいものとして注目されるが、名称が国語学研究室でないことにこの際とくに注意したい。上田が国語問題に対してもっている関心のふかさを反映しているものと思われる）。

しかし、以上の諸課題は、研究が狭義の言語の研究の範囲にとどまるかぎり、その努力がいかにかさねられても、最終的に解決するはずはない。いうまでもなくそれらはすべて社会的な問題であり、政策的な問題だからである。したがって、そこでは日常の言語にまつわる問題が正面からとりあげられてはいるものの、国語調査委員会のメンバーが言語研究者であるかぎり、てにあまったことと想像される。上田の後継者としては、弟子の保科孝一（1872～1955）がいたが、35年後に国立国語研究所が設置されるまで（1948）、上田の問題意識は、十分に解消せずとくをすごすこととなった。国語調査委員会の刊行物には「音韻調査報告書、同分布図」「口語法調査報告書、同分布図」「疑問仮名遣」「仮名遣及仮名字体沿革史料」「仮名源流考、同証本写真」「周代古音考、同韻徴」「平家物語につきて

の研究」「口語法、同別記」などがある。短期間に、ずいぶん業績をあげたものである。吉田澄夫はこれらを総括して「国語問題解決に目前に寄する点は少なかつたとの非難もないではないが、国語研究史上において、これらの業績は、きわめて大きな価値を有するものである」（『国語学大辞典』）とのべ、その間の事情をよくつたえている。

16. 以上、日本人による日本語研究千年のながれを略述したが、繁簡よろしきをえず、すみずみにゆきとどかなかつたことを反省している。また、おおくの諸先輩のちのにじむような業績を、誤解して紹介したことをおそれる。しかし、冒頭にのべたとおり、研究が切実な現実問題の解決を契機としてスタートし、ついで学問の自律作用によって発展、展開する。そしてつぎに発生するあたらしい刺激を契機として、研究はふたたびあたらしい局面をむかえるといった、おおきなうねりのようなものは、巨視的たちばから、まがりなりにとらえたのではないかとかんがえている。

17. では、現代の日本語研究は、いったいどのように位置づけることができるのであろうか。そのへんの展望を適確におこなう自信は、実はほとんどない。しかしあえておこなうなら、つぎのようにならうか。

最初に、専門的な言語研究の世界が、地球的に激動していることに注目したい。研究は本来進歩するはずのものゆえ、流動はいつの時代にもつきものにはちがいない。しかしそのはげしさが、最近とくにいちじるしいようにおもわれるのである。文法研究を中心にして、そのほか従来ほとんどかえりみられずてのつけられていなかった部門への急速な拡大がみられる。日本人の日本語研究は、各時代、多少とも世界の言語研究の潮流の影響をうけてきた。今日、それがこの激動と無関係なはずはない、というわけである。以上を日本語研究の現状をとらえる第一の視点としたいと思う。伝統的な日本人による日本語研究が、その専門性にもとづいて、ひきつづき対象に沈潜し深化されていくことは、もちろん大切なことであろう。しかし、もし日本語研究の全体がそこにのみとどまっていこうとしても、もは

やそれはゆるされないというのがわたくしの予感である。万一そんなことになったら、将来にむけて、次代をになうおおくのわかい研究者をひきつけていくことはできない、とおもうのである。

18. 外界にめを転ずれば、第一に、エレクトロニクスの発達にともなう情報処理の現場における日本語の問題が、切実なテーマとしてわれわれのまえにたちはだかっていることに注目せねばならない。いわゆる国語学者たちも、この問題からめをそむけていることができないようである。

ワープロやパソコンによる日本語文書の作成、音声タイプライター、はては機械翻訳にいたるまで、そのすべてが、極言すれば、文学部のそれもいわゆる国語学者のみのおえない情勢になってきているというのが、冷厳な事実である。おもいがけない分野のひとびとが、われわれのめのとどかないところで（企業秘密のペールのかげで?）、多量に、精力的に、日夜日本語の問題にとりくんでいるようである。そして、そういう世界でとりあげられ、解決されつつある問題が、いずれは総括統合されて、日本語研究全体のはばをひろげ、水準をたかめていくものと思われる。

19. 外的変化の第二点として、日本語を研究するひとが、日本人だけでなくなくなった点も、最近の注目すべき特色とすることができる。古来、日本語に関心をよせた外国人はすくなくなった。しかし、すでにのべたように、その研究は、日本人の研究とほとんど交差せずにおこなわれてきたといっている。しかし、ちかごろの状況は、それとは異質のものとなっている。量がちがっている。日本語が日本人だけのものでなくなりつつあることの反映、極端な表現をすれば、有史以来のできごとである。しかもそれらは、日本人の日本語研究とふかくかかわりをもちながら発展している。

従来の日本語研究は、当然のことながら、その主流は、日本語を母語とする日本人が意識上で問題となるとかんがえるテーマを、研究課題として優先的にとりあげてきた。母語として日本語をつかっているものにとってあたりまえのことは、研究者の注意をあつめないか、すくなくともあつま

わしにされるのがつねであった。さきに中村氏の例をひいたが、現代語がながいあいだ放置されてきたなど、そのよい例である。

しかしいまや研究者の範囲が国際的規模で拡大してきたことにもなつて、研究課題も格段に拡大した。従来も、あたりまえのようにおもわれてきた問題が、学問の自律性によって次第に研究の対象としてとりこまれることも、たしかになかったわけではない。しかし現在は、まるで違う世界が展開しはじめているといつていい。日本語を母語としないひとびとにとつては、日本人がなにげなしにつかっている日本語のすべてが疑問になりうるのである。そしてかれらから疑問をぶつけられてみると、自在に日本語をつかっているようにみえる日本人も、簡単にこたえられないことがおこつたのである。外国人の日本語研究者の業績が、日本人の日本語研究に刺激をあたえないはずはないのである。

20. 前段でのべたこととも関連するが、日本語の研究者とはいえなくとも、日本語を第二、第三の言語として学ぼうとするひとびとが急激に増加しつつあることも、まさに現代的な現象といえる。外的変化の第三点ということができよう。そして、こうしたひとびとに日本語をおしえる日本語教育の現場を介してあらわれてくる日本語の問題は、すでにのべたように、日本語を母語とする日本人の想像をはかるにこえるところがあるのである。

この切実な問題をすこしでも解決しようとする努力を契機として、今後かならずや日本語研究はあたらしい脱皮をとげていくにちがいないというのが、わたくしのみとおしである。国際化の進行が停止しないかぎり、この傾向はつよまりこそすれ、よわまるはずはない。

日本語教育などは、純粹崇高な学問の世界とは無縁であるというたちばもあろう。たしかに研究と教育とは、すぐにはむすびつきにくい側面をもっている。学問でとりあつかう抽象的な世界とくらべて、教育の現場は混沌複雑な世界である。しかし、日本語研究千年のながれを回顧すれば、そうとばかりはいつていられまいというのが、わたくしのかんがえである。日本語の研究全体が、いまおおきなまがりかどにさしかかっていることは、

否定することのできない事実であろう。

その際、既成の学問研究の体制が障害になりそうな気もするが、外界からの刺激にせむけて、もし学問の自律性や専門性なるものによる姿勢が、万一研究の矮小化につながるものだとしたら、それはもう、学問自体の衰弱以外のなにものでもないとおもうのである。

付記：次の四点を付記したい。

- (a) 小稿は、1988年11月5日、東京の津田ホールで開催された日本語国際シンポジウム「日本語教育の現代的課題」の第1セッション「日本語研究と日本語教育」において、発題者としてのべたことをまとめなおしたものである。
- (b) ここでは、いわゆる学問の基礎的研究部門と応用部門を対比して、後者の優位を述べているつもりは毛頭ない。しかし万一誤解があってはならないので、蛇足ながら付言することにした。ここでは、いわゆる基礎研究と応用研究（現実問題に触発されてはじめられた研究をそういうなら）が、相互に関連しあって発展するものであることを述べた。
- (c) 発表後、寺村秀夫氏から、松下大三郎氏（1878—1935）についてぜひふれるべきだったと、御注意をうけた。松下氏のすぐれた研究は、同氏のながい中国人留学生に対する教育によってつちかわれる面が多かったはずだ、というわけである。外国人に対する日本語教育を土台としてみずからの研究を展開した研究者はほかにもあろうが、やはり本文で松下氏に言及すべきだったと反省している。寺村氏の御注意に感謝する。
- (d) 日本語研究千年のながれのなかで、明治以前について、なぜ敬語の研究がほとんどめだたないのが、気にかかる。そのほか、おこなわれてよさそうなのに実行されることのすくなかった分野がいくつかありそうである。なぜなのか、さらにかんがえていきたい問題である。

（とくがわ むねまさ 文学部教授）